



CASE 2
亜細亜大学

グローバルはアジアから—— 「アジア夢カレッジ」

人材育成の産学連携

産学連携といえば理工系の牙城であり、人社系とは無縁の世界だと思われているふしがある。しかし、産学連携はなにも理工系の特許ではない、その理念は形を変えて人社系でも十分活かすことができる。こうした発想の転換が契機となって、亜細亜大学では中国大連におけるインターンシップという、10年にもおよぶ取り組みが継続されてきた。

通常、産学連携といえば、大学発の技術のシーズを産業界で製品にすることが想定される。日本でも、近年、それを推進するための様々な政策的措置もとられ、徐々に成果も出ているが、まだ十分とはいえないだろう。この産学連携を、人社系、とくに社会科学系にあてはめて考えれば、技術を産み出す人の育成ということになる。これまでは、大学における人材の育成と産業界におけるそれとは、往々にして別物と考えられてきた。



池島政広 学長

しかし、「近年のグローバル化のなかで、産業界は苦しんでいる。大学も改革で苦しんでいる。そうしたときこそ、人を育成しなければならない。大学と企業とが連携して人の育成にあたる、そういう産学連携なんです。そうすることでこれからの日

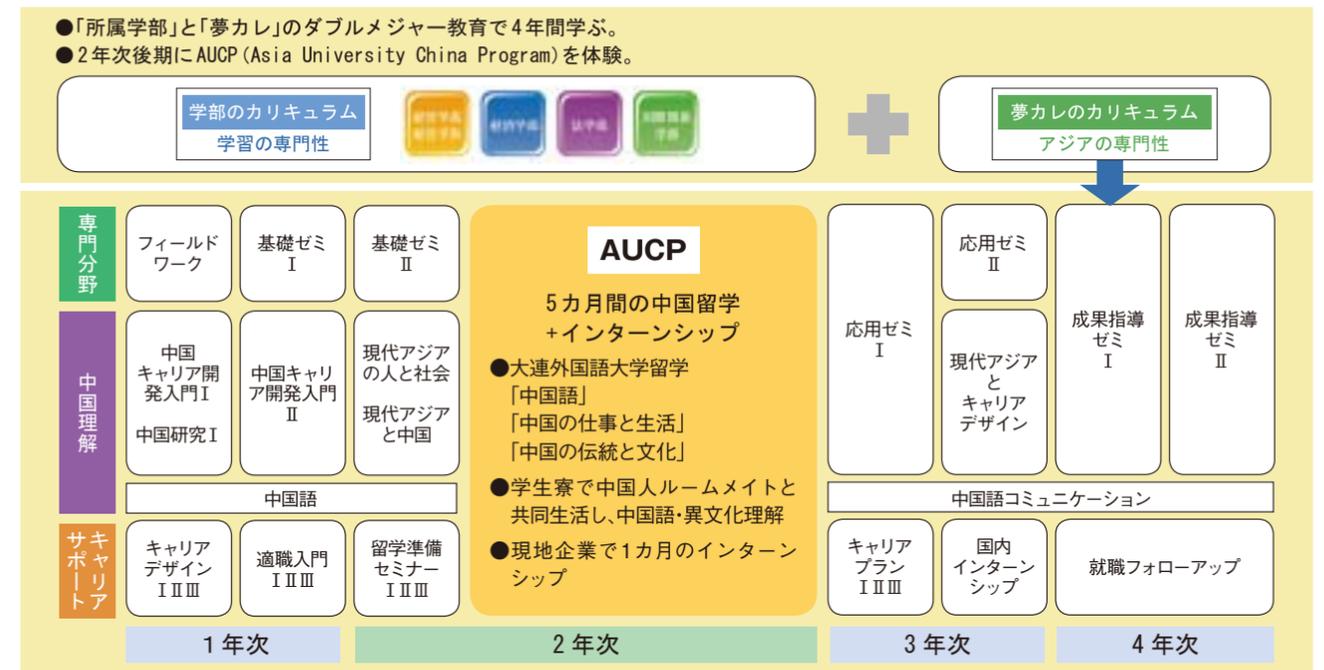
本にとって有用な人材を輩出することができるのです」と池島政広学長は考えている。大学の正規のプログラムとして、2005年より学生を派遣した。今でこそ、大学のインターンシップは珍しくなく、就職のための1つのステップとして利用する学生は多い。しかし、10年前にインターンシップを、これからはアジアの時代と見越して中国で実施する、それも正規のカリキュラムとして組み込んだプログラムは、他にあったろうか。先見の明というほかない。

「アジア夢カレッジ」

海外インターンシップを含んだこの正規のプログラムは、「アジア夢カレッジ」(通称「夢カレ」)という。これは、在学中の4年間にわたって継続する、4学部に通じているプログラムである。学生は、それぞれ所属学部がありその学部の要件にしたがって授業を履修するが、「夢カレ」を希望する学生は、それと並行してこの「夢カレ」独自の授業を履修する。学部の専門性とアジアや中国に関する専門性の両方を身に付けることができ、中国へ留学しインターンシップも経験することでキャリア開発もできるという、盛りだくさんの内容である。

「夢カレ」のプログラムは、1年次から4年次まで3本の柱が貫く(図表1)。1本めは、専門分野に関するもので、「基礎ゼミ」、「応用ゼミ」、「成果指導ゼミ」などの約5名の少人数の

図表1 アジア夢カレッジのカリキュラム



HP、アジア夢カレッジパンフレットより編集部作成

ゼミであり、ここで各自の関心や将来のプランに合わせた研究を進める。2本めは、中国理解であり、まずは中国語の修得、加えて中国の社会や文化を学習する授業から構成される。「夢カレ」生として履修すべき必修科目は、学部や学科によってやや異なるが、この2本の柱で50単位前後にのぼるボリュームのあるプログラムである。そして「学部の専門科目」を並行して受講する。ダブル・メジャー教育と称されている理由が分かる。

3本めは、キャリア・サポートであり、キャリアデザインやキャリアプランなどの一般的な科目とともに、留学準備セミナーなども用意されている。

留学+インターンシップ

このプログラムの極めつけで、3本の柱を貫くのが、2年次後期の5カ月間(8月から翌年の1月)の大連外国語大学漢学院への留学と、そのうちの約1カ月間の大連の企業でのインターンシップである。この5カ月で、中国語にブラッシュアップをかけ、中国の仕事と生活を体験し、中国という社会の伝統と文化に学ぶのである。

大連外国語大学では、学生寮において中国人学生とルームシェアをする。そのことで中国語だけでなく、生きてい

る中国を学ぶことができる。そして、1か月間のインターンシップは、中国でのビジネスを肌で感じることになる。インターンシップ先の企業は、当初は日系企業であったが、現在では中国企業もあり、約30社に及ぶ。

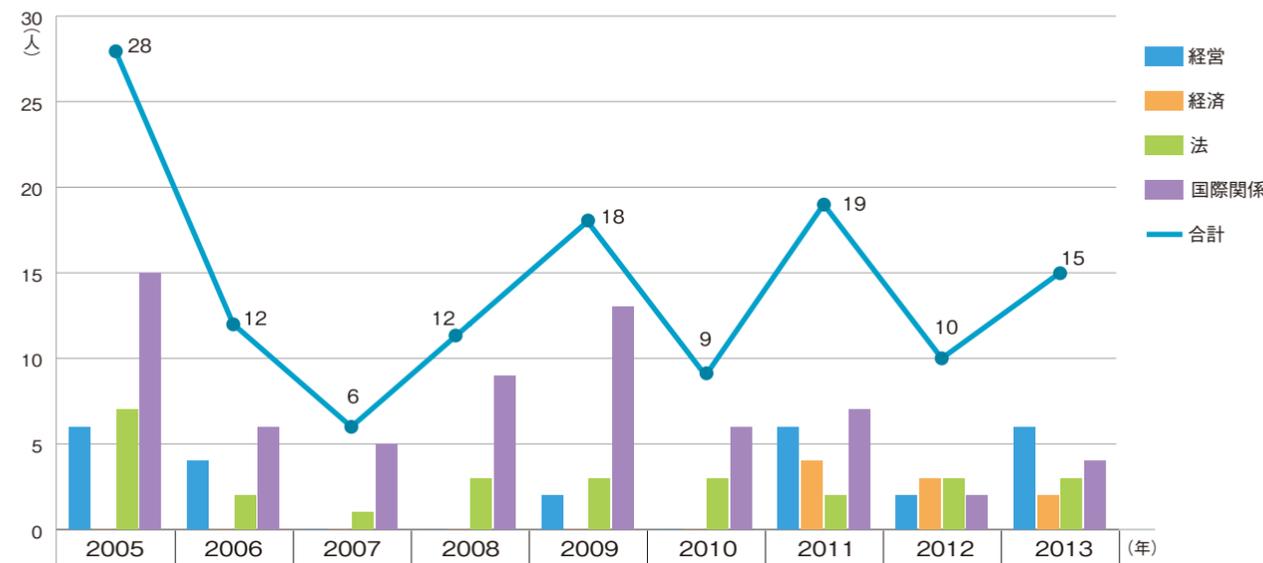
通常、中国の大学において、学生寮で中国人学生と外国人学生を同室に住ませることはできないそうだが、当時の大連市長に掛け合って、それを認めてもらったそうだ。インターンシップ先も、1つひとつ開拓してきたという。

もともと、亜細亜大学はその名の通りアジアの興隆に寄与する人材の養成を掲げて設立されており、とりわけ中国との関係は深い。すでに、半世紀以上前に中国からの留学生を一度に100名近く迎え入れていたなどの経緯もある。そうした沿革のもとに、日本と関係も深い土地柄であり、日系企業の進出も多い、大連という場を選んだという。

「夢カレ」のプログラム履修者は、この留学に自動的に参加できるわけではない。1年次終了までに日本中国語検定協会の3級の取得、2年次前期までの「夢カレ」と所属学部の双方の必修科目・選択必修科目の単位の取得、授業期間中・夏休み期間中の各種の研修や集中講習に参加して所定の評価を得ることなど、厳しい条件が課されている。

大連外国語大学漢学院には、亜細亜大学の専属スタッフ

図表2 アジア夢カレッジ AUCP参加学生数推移



を配置し、留学期間には毎週ウィークリーレポートを作成させて亜細亜大学に送らせる、インターンシップ期間中もインターンシップ先の担当者と毎日のように連絡をとって学生の様子を把握するなど、きめ細かな学習支援体制をとり、円滑な留学経験となるよう配慮している。

留学生活は楽しいことばかりではない。学生は、ほぼ初めての異文化体験であり、ルームシェアする中国人学生との人間関係の構築や、それに加えてビジネスの世界にも放り込まれることによるストレスから、くじけそうになることもあるという。そうした学生のメンタル面でのケアをするためにも、専属スタッフの役割は大きい。

タフになる学生

「夢カレ」プログラムの募集は、大学に入学したばかりの4月初旬である。定員はプログラム開始から40名で変わりはなく、応募者は年度によって変動はあるが、多い年で30名弱、少ない年では10名を下回る時もあったが、ここ数年は15名前後である(図表2)。当初は国際関係学部からの参加者が多かったが、近年はどの学部にも比較的均等に分布している。2010年度まで経済学部からの参加者がいないのは、それまで経済学部としてプログラムに参加していなかったためである。

もっと志願者が増えてくれればよい、と学長は願っているものの、入学直後に「夢カレ」プログラムを履修するか否かの

進路決定をしなくてはならないこと、留学費用が別途53万円かかることなど、学生にとっても保護者にとってもハードルは高い。その意味では、プログラム参加者は文字通り少数精鋭だといってよいだろう。

この留学とインターンシップの成果はどこにあるのかという問いかけに、学長は、「それはなんといってもタフになって帰ってくることです」と明快だ。出発前に、中国語検定の3級をクリアしているとはいえ、それでスムーズに中国語での生活が始められるほどではない。中国人学生とのルームシェア、インターンシップ、すべて自力でサバイバルせねばならない。学長曰く、「異文化のなかでは、はっきりと自分の考えを言い、相手の意見もきちんと理解するというやり取りが重要です。とくに中国の場合、他者との信頼関係を築かなければ前に進みません。大学でもビジネスの世界でもそうであることを体験してきます。5カ月間で随分と鍛えられますよ」ということだ。

単に、大学での語学留学に終わらず、インターンシップがあることの意味は大きいだろう。インターンシップ先での仕事は様々である。学生のインターンシップの体験記によれば、営業担当者に同行して中国ではどのように商談が成立するのかを知ったり、工場の生産現場で製品の出荷を手伝ったり、旅行社で日本向けツアーのチケット手配のデータ入力をしたりなど、まさに中国での仕事のやり方や人間関係を学ぶ絶好のポジションにいることが分かる。

こうした経験をすれば、中国語の力もアップする。大連滞在中には、中国漢語水平考試の5級(1級(低)―6級(高))を受験することになっているが、その合格率は、2011年度で56%、12年度は80%、13年度は93%である。5級は「中国語の新聞・雑誌を読んだり、中国語のテレビや映画を鑑賞することができ、中国語を用いて比較的整ったスピーチを行うことができる」というレベルである。中国語の学習をはじめ、2年間でこうしたレベルに到達するのは、なかなかのものではないだろうか。

また、このプログラムの履修者の就職率は100%であることも、大学の売りである。

客観的な効果指標を示せと言われれば、これらの数値が意味を持つかもしれないが、学長の言われる「タフになる」ことのほうが、より意味があるように思う。「日本にいたままだと、ハングリーになることなく過ごせます。自分たち同年代の若者が、違う世界で違う価値観で生きていることを知ることが大切なのです」と池島学長。肯んずるしかない。

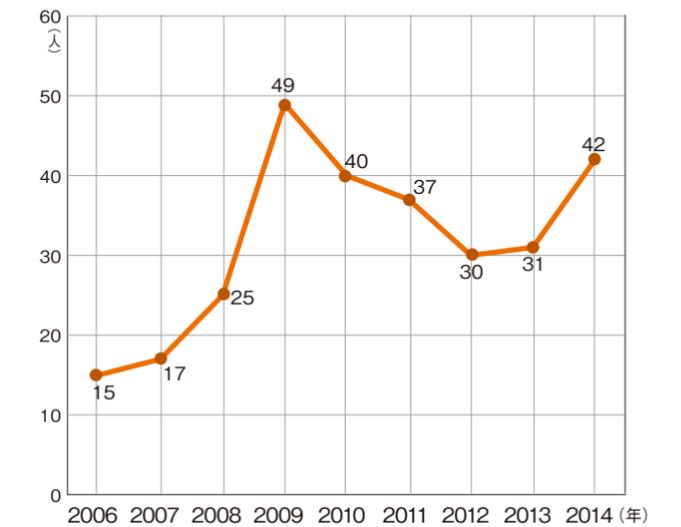
次の夢に向けて

学長の夢はまだまだ成長途上であるが、当面は、アジアに関して、日本の大学のなかでNo.1になることが目標である。それは、大学のミッションであるからだけではなく、今後の世界の動向を考えたとき、アジアが発展のカギを握るからである。

現在の具体策をいくつか示すと、日本の学生を中国に送るのであれば、中国の学生を日本に呼べば相互交流になるということで、大連外国語大学との協定で、亜細亜大学への3年次編入により、両方の大学の学位取得可能なダブル・ディグリープログラムを創設した。2006年からはじまったこのプログラムによる編入生は、徐々に増加し、当初の15名から2014年には42名にまで拡大している。

もう1つは、大連以外の地域での海外インターンシップであり、当面のねらいは、ベトナムである。大連での留学とインターンシップの5カ月は、学長に言わせると短い。もっと長期のプログラムを構築したい。こうした目的のもとで、2014年3月にベトナムの大学を訪問して学術文化交流協定を締結し、大連モデルと称しているインターンシップを組み込んだ留学の可能性を探っている。

図表3 大連外国語大学からの3年次編入生数の推移



それだけではない。すでに亜細亜大学では、この大連への5カ月留学プログラム(AUCP)以外にも、1)アメリカへの5カ月留学(AUAP)、2)14の留学先への3~5週間の短期留学(AUGP)、3)15の留学先への約1年間の交換留学プログラム(AUEP)をもっており、留学は盛んである。この多くが、アジアに力点を置いていることはいうまでもない。

しかしながら、グローバル化が進むなか、アジア各国の言語習得だけでは不十分であり、どの地域でも英語の重要性は高まっている。アジアに焦点を置いて、他方で欧米を視野に収めることが欠かせない。そこで、アジア地域に留学をしつつも、英語の修得も可能になるプログラムを開発し、アジアと欧米との連結ができる人間を育成していくことを、課題としている。

ところで、「夢カレ」に参加した学生は、2013年までの累積は129名、大連外国語大学からダブル・ディグリー取得を目的に3年次に編入した学生は、2014年時点での累積は286名になった。それ以外のプログラムの履修者を含めれば相当の数になる。皆、それぞれにこの留学を活かして活躍している。今後の留学プログラムの発展のために、この人脈を利用しない手はない。これまで卒業生のネットワーク構築の仕事はやや手薄であった。学長の当面の仕事は、いかにして卒業生のネットワークを作り、在学生のグローバル化を進めていくかである。



吉田 文 (早稲田大学教授)